Osaka University Knowledge Archive

Title	＜紹介＞蜂矢真郷著『古代語の謎を解く』
Author(s)	池田, 幸恵
Citation	語文. 2010, 95, p. 63-64
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69164
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

紹　介

蜂矢真郷著『古代語の謎を解く』

池田幸恵

本書は、著者が大阪大学と朝日カルチャーセンターとの共同講座であるHandai-Asahi中之島塾においておこなった市民向け講義、「地名の謎を解く」（二〇〇五年）、「古代語の謎を解く」（二〇〇六年～〇八年）をもとに、一冊にまとめられたものである。語構成から古代語の成り立ちや由来を考察する本書は、その書名のとおり、謎解きのおもしろさに満ちている。

まず、はしがきにおいて、「上代特殊仮名遣」「有坂・池上法則」「被覆形と露出形」などの、本書での謎解きに必要な種々のツールの説明がなされた後で、本題に入る。

第一章の「現代に続く古代語」では、それぞれ対義語・類義語として対比的にとらえられる「縦と横」「男と女」「ヲ［小］とコ［小］」「多少と大小」「高低と深浅」「ワラフ［笑］とヱム［笑］」などの語が取り上げられている。「対比するということは、両者の性格を明らかにしようとするのに、最も基礎的な方法である」（一四頁）という著者の言葉のとおり、類義語や対義語を古代語にさかのぼって、その語構成から考察することにより、種々の発見が可能となる。たとえば、「男と女」において、男を表すものに「コ［子（男）］」と「ヲ［男］」の二類があることについて、これらは上代において、「コ［子］における男の意と子供の意との分化によって、コが子供の意の方に傾向するようになり、男の意を表すものとして新たにヲが用いられるようになった結果ではないか」（五六頁）と推定されたことが、続く「ヲ［小］とコ［小］」の考察により、コとヲとの意味分担（コが小さい意を表し、ヲが男の意を表す）としてとらえられることが指摘される。性格の似た複数の語をともに考察することが、語の性格を明らかにする非常に有効な手段であることを如実に示した好例といえよう。

続く第二章の「一音節の語構成要素」は、ト甲類の語構成要素を取り上げた「ト［利］をめぐって」「ト［門］・ト［戸］・ト［外］」と、被覆形―露出形の対応のあるものを取り上げた「タ［手］・テ［手］など」「マ［目］・メ［目］など」からなる。「タ［手］・テ［手］など」で述べられた、被覆形タ［手］＋タク［手］の構成だととらえられがちなタタクについて、ツク［突］―ツック［啄］、フク［吹］―フフク［噴］などと同じく、一音節語基の重複が接尾辞を伴ったものととらえる説などは、著者の語構成研究の成果の現れといえる。

第三章は「古代からの地名」として、旧国名の「淡路・信濃」、県名の「島根・新潟」、市名の「津・敦賀」、温泉名の「城崎・和倉」が取り上げられている。地名は、その由来が明確ではないものが多く、恣意的な解釈がなされがちなものである。語構成や上代特殊仮名遣などの国語学的知見をもとに、客観的に地名の由来を探る本章は、真実を見つける謎解きのおもしろさに満ちている。たとえば、温泉名「和倉」は、その漢字表記に影響されワ＋クラ

の語構成であると考えてしまいがちであるが、温泉が湧くところの意であるワク［湧］＋ラ（ラは接尾辞）、もしくは、海中に温泉の湧くところの意のワク［湧］＋ウラ［浦］ととらえることが提唱される。著者が指摘するように、後者のワク［湧］＋ウラ［浦］説がもっとも納得でき、現在の漢字表記にまどわされず、地名の由来を考える必要性が痛感される。ちなみに、和倉の項で取り上げられている長崎県の松浦市は現在ではマツウラと訓むが、平戸藩主松浦家伝来の資料を収めた松浦史料博物館の松浦は、今でもマツラである。

なお、本書は第二七二六回の日本図書館協会選定図書となり、多くの公立図書館に所蔵されることとなった。本書を読み、ちまたにあふれる恣意的な語源説にまどわされず、客観的に語の成り立ちや由来を考えたいと、国語学を志す学生が出てくれたら、と願わずにはいられない。

（大阪大学出版会、二〇一〇年三月、三一四頁、二、四一五円）

（いけだ・ゆきえ　長崎大学環境科学部准教授）